

2020年度 第1回教育課程編成委員会記録案

<開催概要>

- 【開催日時】 2020年8月18日(火) 18:30~20:00
- 【開催会場】 東京YMCA医療福祉専門学校(オンライン会議室)
- 【出席者】 永嶋 昌樹氏(K) 三沢 幸史氏(OT) 望月 太敦氏(K)
山田 賢氏(OT) 倉持 有希子氏(K) 中浦 俊一郎氏(OT)
小野 実氏(K,OT)
- 【列席者】 八尾 勝氏(K,OT) 林 恵子氏(K,OT) 品川 智則氏(K)
中村 由美氏(OT)

※名簿のうち Kは介護福祉科部会、OTは作業療法学科部会

今回の委員会はコロナ禍の影響により ZOOM というアプリケーションを利用したオンライン開催となった。出席者、列席者は定時に入室し委員会が持たれた。

I. YMCA デイリーメッセージ

小野氏より8月18日の聖書日課が読み上げられた。

II. 議事

1. 委員会の進め方説明

小野氏より、本日の次第と議事の流れについて説明がされた。

2. 委員自己紹介(近況等)

出席委員、ならびに列席者の自己紹介と近況報告がなされた。今年度より作業療法学科卒業山田賢氏が委員として加わった。

3. 委員長(議長)選出

永嶋氏が全員一致で議長に決定した。

4. 部会(18:50~19:40)

議長より以下の通りに委員が分かれてブレイクアウトルームにより部会が行われることが説明された。

介護福祉科部会: 永嶋氏、望月氏、倉持氏、小野氏、(品川氏)

作業療法学科部会: 三沢氏、山田氏、中浦氏、(中村氏、林氏)

各部会にて50分間話し合いを行った。

5. 部会報告

部会が終了し、全員がメインセッションに集まった。倉持氏より介護福祉科部会、中浦氏より作業療法学科部会が報告された。部会では、コロナ禍によってオンライン授業が準備され、実際に授業が行われる中で培った新しい授業の持ち方についての報告、オンライン授業のメリットとデメリット、対面授業が再開されるようになった時に活用できることなどについて協議された。

※各部会の詳細は別紙にて各部会記録に記載されている。

6. その他

すべての議事を終えて議長が任を終えた。

Ⅲ. 次回日程

2020年10月7日(水) 18:30~20:00

校長より次回の日程が確認された。開催方法についてはZOOMによるオンラインで行われる可能性が高いことが付け加えられた。

記録 林 恵子

介護福祉科部会報告

<コロナ禍における介護福祉科の取り組み>

倉持先生より、別紙資料を用いてコロナ禍のなか介護福祉科で実施してきた内容の報告がされた。

「今年度の状況についての報告」

入学式も実施できず、緊急事態宣言のため、5月7日より授業を開始した。ZOOMを使用してオンライン授業を開始。オンライン授業において、うまくZOOMに入室することができなかったり、WiFiが安定しなかったりすることもあった。最近では改善されてきている。

また、行事関係を全く実施することができておらず、行事を通して培うことができる人間関係に関する学びや経験を実施することできていない。しかし、2年生は昨年度の経験があるので、その経験がコロナ禍でも活かしている。経験のない1年生については、今後、別の形で学ぶためにどのようにしていくか課題として残っている。

今後もZOOMを用いたオンライン授業が主となる方向である。授業の工夫をしているが、演習の授業など対面で実施することで初めて学ぶことができる内容をどう補っていくかが課題となっている。また、1年生の実習Ⅰ（6月実施）のものは、施設実習は中止とし、学内実習で補てんをしている。学内実習を実施するうえでも難しい状況があり、現場で経験できる内容を学内実習でどうつくっていくか、教員のマンパワー、時間的制限などどうしていくなどが課題となっている。

教育の質をどうするか。各担任が個人個人の学生とつながるための工夫をしている。主な工夫としては、ZOOM面談や少人数の勉強会などを通してかかわりをもつようにしている。

オンライン授業（チャット、Google Classroom、グループワークなど）の幅は広がっている。

課題として、今後の見通しを立てにくく、計画的に進められない。例えば調理の授業なども見通して立てることができない。対面の授業よりも労力が多くなっている。

「学生の課題」

学生の不安等をどこまで拾えるか、オンライン授業だけでは、教員との関係性を積み重ねることが難しい。意欲を可視化しにくい授業内で見ることができる学生の姿勢などを確認することができない。特に留学生などは、簡単に考えているところがあるのではないか。授業できちんと学ぶことしなくても、現場で動けてしまう可能性があるそのことが、国家試験への意欲につながらないといった課題がある。

【委員意見／質疑応答】

望月氏：工夫していることがよく伝わってきた。

質問：勉強会などへの参加をしない学生への働きかけについて

→直接、声をかけている。また、必ず参加してもらい必要がある学生には面談をするなどして働きかけ必要性を自分自身で認識してもらおうようにしている。また、意欲低い留学生に対してどう働きかけていくかが課題である。（倉持氏）

質問：オンライン授業で培ってきた内容を今後、どう活かしていくことができるのか

→双方向の授業を展開しやすい。学生の興味をひき出しやすい。通常授業に戻ったとしてもチャット機能など双方向でやり取りができるものは、今後も活かしていく。（倉持氏）

永島氏：ZOOMで実施することで授業の質も上がる部分もある。通常の授業にもどるとしても、コロナ禍で培ってきた方法を通常授業でも活かしていくことが大切である。そのようなメリットのなかで、触れないと学ぶことができない授業をどうしていくか。実技などの介護技術をどう行っていくかが課題となる。

通常の授業において繰り返し練習できない状況は、今後どうしていくか共通の課題である。

<記録：品川智則>

作業療法学科部会資料・報告
～ 2020年度の取り組みについて ～

<緊急事態宣言を受けての授業形態>

昨年度末より新型コロナウイルス感染拡大を受け、4月7日に緊急事態宣言が発出された。その状況を受け、学生には課題とレポートを提示し郵送でのやり取りを行ってきた。5月25日には緊急事態宣言は解除されたが、その間すぐには対面での授業は難しいと判断し、Web 会議システム(ZOOM)や Google Classroom の使用を検討していった。その間に Wi-Fi 環境やデバイスの所持についてアンケートを取り、状況を把握したうえでオンライン授業を開始し、現在に至っている。

【参考】

Zoom：招待された人が参加できる WEB ミーティングツール

Classroom：生徒や学習内容を運営管理できるツール。教材、課題の配布、テストができる

	Zoom	Classroom
利点	<ul style="list-style-type: none">・感染予防（接触なし）・時間の有効活用（移動なし）・忘れ物なし（在宅のため）・グループワークなども可能・チャットなどの機能があり意見が出やすい	<ul style="list-style-type: none">・ペーパーレスで課題の受け渡しができる。・テストの採点やフィードバックなどのやり取りが早くできる・Zoom との併用で効果的・誰がいつ提出したのかわかる・課題の進捗状況がわかる
	・パソコン、タブレット、スマホで参加可能	
問題点	<ul style="list-style-type: none">・Wifi 環境に左右される・教材の事前配布が必要・人数が多くなると、全体が見渡せない	<ul style="list-style-type: none">・テストでは試験監督ができないため不正が可能（テスト形式の工夫が必要）
	<ul style="list-style-type: none">・実習・実技などはオンラインでは難しい・スマホでは使用可能だが操作のしにくさがある	

【委員意見】

三沢先生：毎日会議がオンラインで行われるようになった。初めは疲労感もあったが、慣れてくると違う側面も感じられるようになった。対面との併用でより高い効果を生み出すことができるのではないか。

<オンライン授業における学生の反応>

興味本位から初めのうちは「近代的」「面白そう」など関心を示すような発言等も聞かれたが、時間が経つにつれて、「ビデオをオフにして姿を見せないようにする」、「画面上にて不意に笑顔が見られる」など授業に集中していない場面が見られるようになった。

Wi-Fi 環境が不安定な状況から画像を消すことで声が聞こえやすくなるという声も聞かれたため、状況によってはビデオをオフにすることを認めていったが、そのことで授業に支障をきたす（グループワークの際に意見交換がしにくい、眠くなってしまふ、集中力が続かないなど）様な発言が聞かれていった。

オンラインではわかりにくいとの声（1年生）

連絡事項などの伝わりにくさ

途中退出などによる授業中断 → モチベーションへの影響

<オンライン授業における教員の反応>

教員自身も初めての経験であり、様々な書籍やホームページから情報を入れ、操作方法や授業の工夫について情報を共有していった。比較的早い段階で ZOOM に関しては慣れていったが、Classroom は多少複雑な状況もあってか、得手不得手の差が目立つようになっていった。使用方法においては利用における動画作成や、具体的な資料作成、試験作成にて情報を共有していったが、苦手意識がぬぐい切れない状況は続いている。

また、授業の進め方に関しては苦労しているところである。今まで使用していた資料をオンライン用に変えていく必要があるからだ。学生においては上記のような反応であるが、それは授業の作り方にも、より工夫が必要であると考えている。学生が主体的に授業に取り組み、理解できたという実感の中で進めていくためには、集中を切らせない、参加型の授業を目指す必要がある。この変化に乗っていくためのオンライン用の教材の作成が急がれる。

もう一つ大きな問題がある。それは実技系の授業である。前期に関しては、フェイスシールド、マスク、手袋着用にて行った。トラブルもなく無事行えたが、何が正解かもわからず手探りの状況で行ったことに関しては、今後においても不安が残る。残暑も厳しい中で熱中症の心配もしていく必要もあり、今後も情報収集をしながらスケジューリングしていかななくてはならない。

【委員意見】

山田先生：昔ならこんなことはできない。オンライン授業はすごいな、と言う印象。先生方は一生懸命だという印象。この形式だからこそ勉強しやすいと言う学生もいるのでは。

中浦先生：チャットなどで表現しやすい。注目度も。

三沢先生：大学 1 年生の子どもオンライン。課題を学生同士で共同作業も行っている。一度もあっていない学生とやることは大変だったと思う。

中浦先生：対面授業も取り入れているので仲良く密を心配している状態。

三沢先生：課題をどう提示するかが課題だと思う。当事者学習は？

中浦先生：今年度は国立のレジリエンスでオンラインでの協力をしていただく。

<実習関係>

当校の実習に関するスケジュールは以下の通りである。

- ① 6月初旬 3年生 8週間の総合実習
- ② 7月初旬 1年生 3日間の演習
- ③ 8月中旬 2年生 4日間の演習
- ④ 8月下旬 3年生 8週間の総合実習
- ⑤ 1月初旬 2年生 3週間の評価実習
- ⑥ 2月初旬 2年生 3週間の評価実習

①に関して

学校側の判断にて全面中止とし、すべての学生において学内実習を課した。学内実習においては以下のことを気づきとして得ることができた。

●良かった点

- ・課題の提示の仕方によってある程度の成果を確認することができる
- ・精神領域においては家族への介入を通して「生活者」としての自分や家族、そしてこれらを取り巻く環境にも目を向けることができた
- ・身体領域においては、自らケースを設定し、自らの活動を分析して自助具まで作成することで評価から治療の流れをイメージすることができた

●改善すべき点

- ・出欠確認に関して厳密に行うことができなかった
- ・「課題を出せばいい」という流れになった学生もあり、物理的な問題から細かく指導しきれなかった（来校させるにあたって、基準が明確ではなかった）
- ・課題量の適切さを図ることができなかった

②③に関して

- ・十分なコロナウィルス感染対策（前後2週間の自宅待機・体調管理シート記入）
- ・病院、施設様のご協力により全員を参加させることができた
- ・体調不良に関してはいつも以上に慎重になっている施設様も多かったが、行けなかった日に対しては代替日を設けて頂くなどご配慮いただけた

④に関して

- ・新規感染者拡大の影響から全員の実習地を確保できなかった
- ・学生の中には本人、もしくはご家族の感染への不安が強いケースもあり、個別にて対応している
- ・病院によっては実習期間の短縮にて引き受けてくださるところもあった

⑤⑥に関しては、今後の状況を見ながら決定していく予定である。

【委員意見】

山田先生：この大変な時期に実習地確保は素晴らしい。学内実習は大変だったと思う。

中浦先生：学生もよく頑張ってくれた。

三沢先生：学生実習生受け入れ再開。以前と同じようには受けられない。学生が密になってしまうとクラスター発生の危険。間引いている状態。

中浦先生：調整しながらの受け入れ。

三沢先生：卒業生が就職したときにどうサポートするか。

山田先生：OT、2名体制リハビリ特化で復職されている方もいる。ニーズが高い。状況に応じて切り替えが大事。

中浦先生：関係性を密に。SOGO 学習ではぜひご協力を。

山田先生：地域を知ることも大事。

中浦先生：臨機応変さ、切り替えはそれぞれ。

山田先生：コロナ対策は当たり前のことをやっている。マスク着用。今回のことで初心に帰って当たり前の感染対策ができるようになった。実は普段からやるべきだったのかもしれない。

三沢先生：臨床現場でフェイスシールドを使うのは聴覚指導士のみ。手袋もしていない。

<記録：中村由美>